SHAMBHALA SUN
2010年11月

最も優しい者が生き残る

ポール・エクマン

心理学者のポール・エクマンは、チャールズ・ダーウィンの慈悲に対する真の見解を明らかにしているが、それはあなたが思うようなことではない。利他主義は人間や動物の生命に重要な要素であるという彼の信念は、現代科学によって確認されつつある。

チャールズ・ダーウィンは死去する11年前の1871年に『人間の進化と性淘汰』という「未読の名著」と呼ばれる本を出版した。この本の中でダーウィンが共感について論じていることはあまり知られていないが、それは誤ってダーウィンと結び付けられてきた、人間の本性とは競争的で冷酷、利己的である、という見解に反する彼の考えの一面を明らかにしている。

「人間と下等動物の知能の比較」と題された第4章でダーウィンは、彼が「同情」（今日では共感、利他主義、思いやりなどと呼ばれるだろう）と呼ぶものの起源を説明し、いかに人間や他の動物が苦境にある他者を助けに行くかについて述べた。このような行動は家族という集団の中で最も起こりやすいことを認めつつも、最高に徳の高いこととは、人間であれ人間以外の生き物であれ、生きとし生けるものすべての安泰に関心を持つことである、とダーウィンは書いた。

チャールズ・ダーウィンが種の連続性にこだわったことを考えれば、他者の安泰を気にかけるのは人間のみの特性ではない、と彼が主張したのも驚くべきことではない。ダーウィンは次のように語っている。「数年前、動物園の飼育係が、うなじについたまだ治っていない深い傷を見せてくれた。同じ区画に住んでいたこの飼育員の友達である小さなアメリカザルは、大きなヒヒをひどく恐れていた。それにもかかわらず、猿は友人が危機に瀕しているのを見るや救助に駆けつけ、叫び噛みついてヒヒの気をそらし、飼育員は逃げ出すことができた」この事件は、F.B.M.デ・ワールによる2004年の研究 On the Possibility of Animal Empathy（動物の共感の可能性）と一致している。

ダーウィンによれば、このような行動を起こす可能性が最も高いのは、助ける者が助けを必要とする者と血縁関係にある場合だという。『人間の由来』の中で彼はこう書いている。「まず第一に、人間における本能的な衝動の強さに違いがあるのは明らかである。未開人は同じ共同体の一員を救うために自分の命を危険にさらすが、見知らぬ者には全く無関心である。若くて臆病な母親は、母性本能に駆られると一瞬のためらいもなく、自分の乳飲み子のために最大の危険を冒すだろう……」

しかし、例外的な人々は親族や愛する人だけでなく、見ず知らずの困っている人も助けると、ダーウィンは認識していた。「それにもかかわらず、これまで他人のために命を賭けたことはないが勇気と同情心に満ちた文明人の多くが、自己保存の本能を無視して、見知らぬ溺れている人を助けようとすぐ激流に飛び込んでいる。この場合人間は、前述した英雄的なアメリカザルが、恐ろしいヒヒを襲って飼育員を救ったのと同じ本能的動機に駆り立てられている」ダーウィンの考え方は、K.R.マンローが1996年に発表した、自分の命を危険にさらして見知らぬ人を救い出す例外的な人々に関する研究、The Heart of Altruism: Perceptions of A Common Humanity（利他主義の心）でも裏付けられている。

なぜ一部の人だけが、たとえ自分の命を危険にさらしてでも見知らぬ人を思いやるのか、ダーウィンは考えなかった。そのような配慮をする遺伝的素因があるのか、それとも育った環境によるものか、あるいはその両方から生じるのか。また、そのような見知らぬ人への思いやりを持たない人でも、それを培うことが可能かどうかについても、ダーウィンは書いていない。

今日、こうした疑問は理論（P. Gilbert, ed. *Compassion,* Routledge, 2005参照）や実証的研究（D. Mobbs, et al. "A Key Role for Similarity in Vicarious Reward," Science, 2009）の焦点となっている。Psychological Bulletin誌に掲載されたCompassion: An Evolutionary Analysis and Empirical Review（思いやり：進化論的分析と実証的検討）では、ゲッツ、ケルトナー、サイモン＝トーマスが、共感、利他主義、思いやりに関する心理学文献を分析し、思いやりを感情とみなすべきことを示唆する新たな証拠をあげている。今後発表予定の論文であるCompassion and Altruism: A Reformulation and Research Agenda（思いやりと利他主義）の中で、エリカ・ローゼンバーグと私は「家族的な思いやり」と呼ばれるものは対象が限定されているとはいえ感情であると考えるが、他の形態の思いやりを感情として分類することは有益ではない、と主張している。

ダーウィンは思いやりの起源について、次にように説明した。「私たちは、自分自身の辛い気持ちを和らげるために、他人の苦しみを和らげようとする」しかし、仏教学者のB・アラン・ウォレスが指摘するように、すべての人が苦しみに対してそのように反応するわけではない。例えば「自分はあのような人間ではなく、なんと幸運だろう」と考える人もいるかもしれない、と彼は述べている。私は何年も前に自分の研究において、苦しんでいる人についての映画を見た人の約3分の1が苦しみの表情を顔に浮かべ、またそれと同数の人が苦しみの光景に嫌悪感を示すことを発見した。この割合は東京に住む日本人でも、カリフォルニアに住むアメリカ人でも同じであり、こうした反応が文化に影響されないことを示している。

ダーウィンはまた、そのような行動の動機にかかわらず、自然淘汰がいかに思いやりの進化を促したかを述べている。「どんなに複雑な経緯でこの感情が生まれたとしても、それは互いに助け合い、守り合うすべての動物にとって非常に重要なものであるため、自然淘汰によって増加したのであろう。最も共感的なメンバーを一番多く含む共同体が最も繁栄し、最多数の子孫を残すからである」

しかし、ダーウィンの予想に反して、見知らぬ人に対する思いやりや利他主義が国民の大多数によって示されている国は、現在も過去にも存在しない。本章の後半でダーウィンは、思いやりの程度についてより現実的に書いている。

ダーウィンは最高の道徳的美徳と考えるものについて述べることで、思いやりと利他主義の起源と本質についての議論を締めくくった。「人間が文明を発展させ、小さな部族が大きな共同体へ統合されるにつれて、個人的に知らない人を含め、同じ国の人民全員に対して社会的本能を強め同情を寄せるべきだと、最も単純な理性が一人一人に教えるだろう。この点にいったん到達すれば、あとは同情心があらゆる国や人種の人々に広がるのを妨ぐ、人為的な障壁があるだけだ。（もし違う人間に見えるとしたら）残念ながら同じ生き物として見えるようになるまでどれほど時間がかかるか、経験によって示されている。人間の枠を超えた共感、つまり下等動物に対する人間性は、最近獲得したモラルのひとつのようである……この美徳（下等動物に対する配慮）は、人間に備わっている最も高貴なもののひとつであり、私たちの共感がより優しく、より広く拡散し、一切衆生に及ぶようになることから、付随的に生じるように思われる」

感情や思いやりについてダライ・ラマと話し合った時（それは私たちの本、*Emotional Awareness*の基となった）前述のダーウィンの言葉をダライ・ラマに読み聞かせた。ダライ・ラマの翻訳者であるトゥプテン・ジンパは「彼は『一切衆生』という言葉を使ったのか？」と叫んだ。ジンパが驚いたのは、この言葉が、菩薩のすべてを包み込む慈悲、という仏教の説明を正確に英訳したものだからだ。

チャールズ・ダーウィンは、当時の思想家としては珍しくこのような考え方をしたが、20世紀後半になってようやく、人間以外の生物に対する思いやりの念が一般に広まった。ダーウィンは時代をはるかに先取りしていたのである。

仏教の徳観とダーウィンの徳観が驚くほど似ていることから、ダーウィンは仏教の書物から自分の考えを導き出したのではないかという可能性が出てくる。ダーウィンは『人間の由来』を書くまでに、少なくとも仏教について何か知っていた。ダーウィンの最も親しい友人であったJ.D.フッカーは、長年ヒマラヤで過ごした。ダーウィン研究の第一人者であるジャネット・ブラウンは「フッカーがシッキムやインドの他の場所を旅行した後、ダーウィンとそのような話題を話し合ったかもしれないことは容易にありうる」と私に語った。Evolution: The Selected Letters of Charles Darwin（進化論： チャールズ・ダーウィン書簡集）の共同編集者であるアリソン・パーンは、フッカーがインドからダーウィンに宛

てた手紙の中で仏教について触れていることを指摘している。とはいえ、道徳と慈悲に関するダーウィンの考えの核心は、ビーグル号の航海から帰還した2年後、ダーウィンが29歳だった1838年のノートに現れている。フッカーと出会う5年前のことである。

ダーウィンの曾孫であるランダル・ケインズは、ノートに書かれたこれらの問題についてのダーウィンの考え方を、次のように述べている。「ダーウィンのコメントは言葉足らずだったが、その根底にある狙いに疑いの余地はなかった。[ダーウィンはこう書いている]『私たちの善悪の感覚は、他者に対する愛と関心という本能的な感情と結びついた行為について、高まっている精神力で塾考することから生まれるのではないか？　社会的本能を持ついかなる動物が内省の力を発達させれば、それは良心を持つに違いない』」

ダーウィンはノートにこう記している。「その発端について考えることなく……個人は自分のことを忘れ、自らを犠牲にして他者を援助、擁護し、他者のために行動する」ダーウィンは人生のこの早い時期に、道徳の起源にも興味を持っていた。「最大の善を生み出したもの（というより、善のために必要なもの）は、（本能的な）道徳の感覚である……幸福のルールを判断する上で、我々は遥か前方（と一般的な行動）を見なければならない - それは確かに遥か昔、我々の善のために最も良いと一般的にされていたものの結果だからである……社会は、道徳的感覚無しでは、進むことができなかった」

ダーウィンは、デイヴィッド・ヒュームに影響を受けたことを言及している。1838年、ダーウィンはヒュームの*Enquiry Concerning the Principles of Morals*（道徳原理に関する探究）を読み、彼の考察が神の教えから切り離された理論を展開するために重要だと考えた。ランダル・ケインズは*Darwin, His Daughter & Human Evolution*（ダーウィン、彼の娘と人類の進化）の中で、こう述べている。

> デイヴィッド・ヒュームは、道徳原理の自然な源についての思考の中心に、同情を置いていた。同情は抽象的な概念に基づく態度ではなく、自然な感情である、と考えていた。「いかに些細であっても、私たちの胸には博愛の心、人類に対する友情の閃光が宿っている。狼や蛇の要素とともに、鳩の粒子も私たちの骨格に練り込まれている」チャールズは今やこの考えを発展させ、私たちの道徳観もまた、その感情から自然に育まれるのではないかと推測した。[ダーウィンはこう書いている] 「博物学者が他の哺乳類動物を見るように人間を見れば、人間には親として、夫婦としての本能、社会的な本能がある、と結論づけられるかもしれない……こうした本能は、対象物への愛や博愛の感情からなる……個人が自分自身を忘れ、自らを犠牲にして他者を助け、守り、行動するような、積極的な共感である」

ジェームズ・ムーアとエイドリアン・デズモンドは『人間の由来』の序章の結びで、この本を研究したダーウィンと同時代の人たちの中には「義務、無私、思いやりといった、ダーウィンのヴィクトリア朝的価値観の人道的側面」を強調した者がいたと書いている。「フランシス・コッブ（フェミニスト理論家であり、動物愛護活動の先駆者）は『この著者は、無意識のうちに自分自身の異常なほど寛大で平穏な性質を残りの人類に当てはめ、あたかも世界がダーウィンでできているかのように理論化した人間である』と読者が想像するのも無理ないとした」

慈悲、利他主義、道徳に関するダーウィンの考え方は、「適者生存」（実際はダーウィンではなくスペンサーの言葉）というキャッチフレーズに注目する人たちが描く、この偉大な思想家の関心事とは、明らかに異なることを示している。ダーウィンの著作を知らない人々、そして一部の科学者でさえ、ダーウィンが人類の結束に献身してていたこと、死刑廃止論者であったこと、道徳的原則や人間や動物の福祉に強い関心を持っていたことに気づいていない。

ポール・エクマン は感情スキルや非言語コミュニケーションの分野で著名な専門家であり、顔の表情を分析して欺瞞などの心の状態を明らかにするテクニックの先駆者。*2008*年にダライ・ラマと共同で *Emotional Awareness* を出版。*2009*年に*TIME*誌により、最も影響力のある*100*人のひとりに選ばれる。

© Shambhala Sun, November 2010